5．研修日記

12/22 日曜日

12月22日の朝、中央アジアの国キルギスへ向けて出発。長い旅が始まった。

まずは、新千歳空港から成田空港へ。成田空港では、少し遅い朝食を食べた。1週間以上も日本を離れるため、多くの参加者が日本食を食べていた。日本の味を噛みしめ、いよいよ出国。出国審査を済ませ、モスクワのシェレメーチエヴォ国際空港へ向けて出発。

10時間のフライトの末、モスクワに到着しましたが、ここでハプニング発生。空港に到着すると、なぜか長蛇の列。乗り換えの便の出発が迫っている人が優先的に検査されるため、並んでいても次々と新しい人がやって来て抜かされる。結局、空港に到着してからキルギスへ向かうターミナルに行くまで2時間ほどかかった。ロシアの洗礼にみんなぐったりだった。

しばらくターミナルで過ごした後は、最後の便に乗り込んだ。機内では、ゆっくりと体を休めることができた。モスクワを出発してから約4時間、ようやくキルギスのマナス国際空港へ到着。ロスト・バッゲージもなく、全員無事にキルギスの地に足を踏み入れることができた。マイクロバスに乗り、首都ビシュケク市内へ向かっていたが、ここでまたハプニング発生。予定していたアンバサダーホテルに到着したと思いきや、着いた先はソルテルホテル。事情を聴くと、アンバサダーホテルは改修中で宿泊できないと言われ、衝撃を受けた。不安を抱えながらソルテルホテルの部屋に入ってみると、意外にも部屋は広く快適で、さっきまでの不安は一気に消え去った。とても素敵なホテルに泊まることができ、この研修への意欲がより高まった。（染谷惇志）

12/23 月曜日

JICA事務所や大使館を訪問。どちらも緊張感があった。JICAキルギス事務所の所長のお話では、インフラの不備や建築物の老築化などの課題が挙げられ、キルギスが直面している様々な問題について聞くことができた。夜の懇親会では、大塚隊員、中野隊員、本田隊員とおいしいキルギス料理を堪能した。隊員の方々とは、セントラルヒーティングの環境問題について伺い、生活上の身近な問題についても聞いた。そのレストランでは、民族ダンスや楽器を楽しむことができ、キルギスの民族ダンスであるЖалын бий（ジャルンビー）と出会った。キルギスの学校訪問先の子供達に披露するために、その日の夜からダンス練習を始めることとなった。

キルギスの新たな課題と文化に触れた一日だった。（長田真希子）

12/24 火曜日

まずはこの日のメインイベントである、ビシュケク69番学校視察へ。民族衣装を着た生徒達が玄関ホールで待っていてくれて、キルギスの伝統的弦楽器である「コムズ」とアイヌのムックリに非常によく似ている「口琴」で演奏をしてくれた。はにかんだ笑顔や「コンニチハ」と声を掛けてくれる姿に思わず顔がほころぶ。キルギスの人達のおもてなし文化を初めて体験し、心の底から感動した。その後、校長先生から学校についてご説明いただいた。69番学校はギムナジアと呼ばれる初等・中等学校で、外国語教育に力を入れており、人気のある学校だそうだ。各教室に電子黒板やプロジェクターが設置されており、日本の学校以上だと感じた。その後、普段はビシュケク教育局で活動されている青年海外協力隊員の大塚さん、本田さん、中野さんが特別に20分ずつの授業を見せてくださった。真っ直ぐに授業に向かい、活発に発言する生徒達の様子に感銘を受けた。昼食は授業してくださった隊員の方々と、プロフセンターへ。その際に、本田さんに活動する上で大切にしていることを尋ねると、「先進国から途上国に来るとつい上から目線になりがちだが、今あるこの国のシステムはこの国の人達が一生懸命に創りあげてきたもの。絶対に否定せずに、そのやり方は素晴らしいが、こうするともっと良くなると僕は思うのですが、どうですか？と伝えるようにしている」という答えが返ってきた。ここから国際協力の大切な視点をいただくことができた。

その後、７時間ほどかけてカラコルへ移動。予定より２時間も遅れて到着した我々をイシククル州で活動されている青年海外協力隊員の方々が温かく迎えてくださり、一緒に夕食をいただいた。特に、園中さんから伺った、「“支援”ではなく、“共有”と考えている。全員が全員、変化を求めている訳ではない。変えたいことがあっても、相手が求めていなければ自分が妥協する。」というお話から相手を尊重しながら活動をされている様子が伝わり、深く印象に残っている。その後、ホテルへチェックインし、夜のミーティングを終え、充実した長い一日が終了した。（山本つぐみ）

12/25 水曜日

最初に、11番学校で園中隊員の英語の授業を見学。69番学校と同様、第２・第３外国語の習得レベルに驚かされた。授業見学後は５年生の子ども達と交流会を開催。日本の遊びとして「お手玉」「おはじき」「けん玉」「紙飛行機」を体験してもらう。どれも見慣れない遊びか、楽しそうに取り組む姿が見られた。最後は、普段踊り慣れていない高校教員の私と立田先生にとって、鬼門のパプリカダンスを披露した。

ランチはドゥンガン村の農家のお宅。ドゥンガン村は他国の様々な民族が入り混じっているコミュニティである。「多民族で困ったことはないか」という質問をしても、特にない様子。顔や文化、言葉が少し異なっても、昔からなじみがあるためか、それが普通になっている。学校のクラス経営においても、生徒たちにこのような考え方であれば…と少し思った。ドゥンガン村は野菜栽培が得意で、馬鈴薯・人参・きゅうり・トマト・ハーブ類・ニンニクを栽培している。ランチの際に、生野菜を振舞ってもらったが、抜群においしかった。しかし、農産物の価格が安いため収入は少なく、出稼ぎのため海外に行くことが多いそうだ。「収入が少ないため出稼ぎは仕方ない。ただ家族が心配だから、本当は一緒に暮らしたい」と漏らしていた。また、ロシアやウズベキスタンへは陸路で輸出をしているが、突然検問が閉まることがあり、流通の不安定さが感じられた。栽培技術に長けているとはいえ、キルギスには農協や農業改良普及センターのようなものはなく、営農・技術指導を受けられる仕組みはほぼない。“美味しさ”というポテンシャルの高さと、“流通の仕組み”の課題を感じるランチだった。

次の視察先であるコンキノ学校では、民族衣装で歌や踊りのおもてなしを受ける。キルギス教海研のテーマ曲『ジャルンビー』を爆音で披露していただいた。

一村一品プロジェクトでは概要説明・加工場見学（食品製造・フェルト製品・染物）をした。フェルト製品の施設は無印良品の認定工場として稼働しており、日本基準の厳しい製造管理がされている。家庭を大事にする文化でもあるため、働き手の勤務時間やノルマは決まっておらず、１個だけ作って帰宅するなど働き方は選べる。こういった施設ができたおかげで、女性が働く場所が確保されている。製造方法や働き方にも、キルギス人の性格を踏まえた工夫がされている。概要説明の中で「特別なものは使わない。誰でもできることを進めていく」という話をしていた。途上国の支援に限らず、持続可能な発展には人を理解し、人に寄り添った活動の延長線上にあるのかもしれないと感じた。（渡邉琢益）

12/26
木曜日

カラコルを出発し雄大な天山山脈、点在する馬や羊の群れ、どこまでも広がるイシククル湖を眺めながら、イシククル州南岸のジョイントワークショップへ向かう。ワークショップにて現地女性の方々からフェルトのコースター作りの指導を受けつつ、様々なインタビューを行うことができた。ワークショップの女性の6～7割が誘拐婚によって結婚をしていたことに驚く。ただ、どの女性も多くの子どもたちに恵まれ、今の生活は幸せだという。一人の女性が「一村一品プロジェクトによって出稼ぎに行く必要もなくなり、安定した収入を得ることができるようになった。日本人には感謝しています。」という言葉が印象的だった。

ホームビジットでは、現地家族から信じられないほど盛大な昼食を振舞われ、キルギスの「おもてなし」文化に対して改めて驚きを禁じえず。昼食後、5時間ほどかけて再び首都ビシュケクへ。夜は元キルギスの青年海外協力隊員の中村さんから、キルギスで隊員として貢献しようと思った感動的なお話を聞くことができた。移動距離が長い一日ではあったが、晴天にも恵まれ、とても充実した一日であった。（立田和久）

12/27 金曜日

午前中はテンサイ学校へ。１・２日目にお世話になった青年海外協力隊員の大塚さんも来ていた。私たちが教室に入ると「おはようございます」、出るときには「さようなら」と挨拶する子どもたち。69番学校、11番学校の授業ではノートの代わりに２人で１枚の紙を使っていたけれど、私立のテンサイ学校はみんながノートを使っている。教室にトイレがあったり、休憩するソファーがあったりと、いろいろな驚きがあった。そして、70人以上の子どもたちとの交流会！遊んだ後は、パプリカダンスと昨夜特訓した「ジャルンビー」を披露。子どもたちも日本語で歌ってくれた。

午後は障害児教育をしているセジムタール学校へ。各教室を見学してから、ミニ交流会。子どもたちと一緒に紙ヒコーキと、色オニをした。色オニに参加しない男の子がいたので、彼と私は教室の隅でキャッチボール。私が投げたボールをキャッチした彼の目がキラキラ輝いたことが忘れられない。最後は一緒にパプリカダンス。短かったけれど、充実した時間だった。交流後、創設者の方のお話を聞き、「大事なことは、愛・理解・認めること。これがあれば花がひらきます」との言葉に共感。障がいがある子を恥ずかしいと思わないでほしい、教育を受けられるようになってほしい、そんな思いが募った。「社会に貢献したい」と障がい者への理解が乏しいキルギスに一石を投じた創設者の熱意と強さを感じた。私は、社会のために何ができるのだろう…。

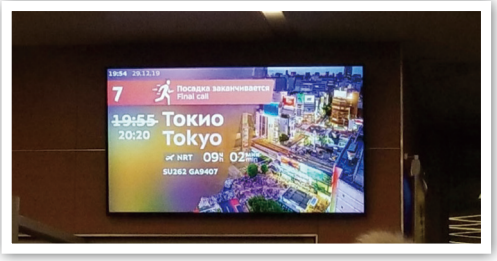
その後、日本人材開発センターへ。テンサイ学校・セジムタール学校の創設者も卒業したmini-MBA講座についてお話を伺い、場所を変えて閉講式に出席した。閉講式が30分程遅れた以外はほぼスケジュール通りだったことに違和感を覚える不思議。「日本とのつながり」を感じる１日だった。ホテルでの夕食に、ビシュケク隊員の本田さん、大塚さんが来てくれた。テンサイ学校でいただいたシャンパンで乾杯！今日も、素敵な出会いに感謝。（増永真衣）

12/28 土曜日

JICA事務所にて研修の振り返りを発表することで、今回の研修の目的・成果・帰国後に子ども達へ還元したいこと等を整理することができた。また、市街地での教材購入は、授業づくりのプラスになりそうな物をたくさん購入することができた。

移動日を除くと、実質本日がプログラムの最終日となる。ここまで一日一日がとても濃く、あっという間にキルギスでの日々は過ぎていった。とても名残惜しい。（重道真也）

12/29
日曜日



ついに帰る日になってしまった。ホテル出発は午前3時。眠たい目をこすりながら出発。キルギスのおいしい料理、豊かな自然の風景、多民族で構成された文化、人々の温かさや笑顔などを思い出しながらバスに揺られ、マナス国際空港へ行き飛行機に乗り込んだ。

モスクワのシェレメーチエヴォ国際空港に到着。検査もスムーズに進み、あっという間に終了。入国時の混雑ぶりは何だったのかと思ったが、海外ではよくあることなのだろう。このシェレメーチエヴォ国際空港では、12時間のトランジットがあったので、私を含めた小学校教員3人は授業づくりの話し合いをした。キルギスで見たこと、聴いたこと、体験したこと、感じたことを出し合い、クラスの子どもたちの実態に合わせた授業を考える。ああだ、こうだ言い合い、カフェを2軒はしごしていたら、あっという間に集合時間。「普段、こんなに授業について考えたり、話し合ったりしないよね。」と言い合うくらい議論を重ねることができた。飛行機に乗り込み、出発予定時刻から遅れること1時間、モスクワを後にした。（染谷惇志）

12/30
月曜日

また10時間ほどかけて成田空港へ。キルギスで怖い目に遭った訳ではないのに、帰国したというだけですごく安心した。到着したのが正午過ぎだったということもあり、昼食を取った。キルギスの食べ物もおいしかったが、日本の味に飢えていた。成田空港では、相手の立場になってより良い方法を考える空港職員の姿勢を見て、改めて日本のホスピタリティに温かさを感じた。日本が世界に誇れるところを再認識できるような授業を作りたいと思った。いよいよ最後の新千歳空港行の便に乗り込む。1時間半ほどで、北海道に着いた。雪ではなく雨が降っていたことに驚いた。今回の研修を通して、とても貴重な経験をし、様々な学びを得ることができた。この経験をより多くの子どもたちに伝え、価値ある授業づくりをする事を誓って、新千歳空港より帰路につくのであった。（染谷惇志・長田真希子）